

短期大学生調査による個別短期大学における教育活動の可視化に関する考察

- A短期大学の事例を対象に -

- 山崎慎一（桜美林大学）
- 遠藤修司（桜の聖母短期大学）
- 堀完（大分大学）
- 宮里翔大（桜美林大学大学院）
- 黄海玉（短期大学基準協会）

Introduction

学習成果とは、学生が獲得すべきことを定義し学内外に表明したものであり、実際に学生が一定の学習期間終了時に成果として身に付けたもの（データ）として測定可能でなければならない。そして、測定可能になった学習成果を短期大学自身の基準によって判定することをアセスメントと呼び、その中で、学習成果が獲得されたこと、あるいは向上していることを測定結果として示すことが「学習成果の可視化」である…学習成果の可視化の方法、現状等について、短期大学評価基準では「基準Ⅱ 教育課程と学生支援」のテーマ「A教育課程」の区分「基準Ⅱ-A-7 学習成果の獲得状況を量的・質的データを用いて測定する仕組みをもっている」において点検・評価する。

（短期大学基準協会「短期大学評価基準Iについて」<http://www.jaac.or.jp/service/evaluation/faq/hyokakizyun.html> Accessed 2019-8-1）

Method

- 使用したデータ：
2014～18年度「短期大学生調査（Tandaiseichosa）」約84,000件
A短期大学の調査結果：約1,400件（教育系、教養・総合系、健康系）
- 分析手法：
1) 学修行動や教育経験の頻度に関する質問（Q.11）の経年分析
2) A短期大学関係者による分析結果の考察

Result

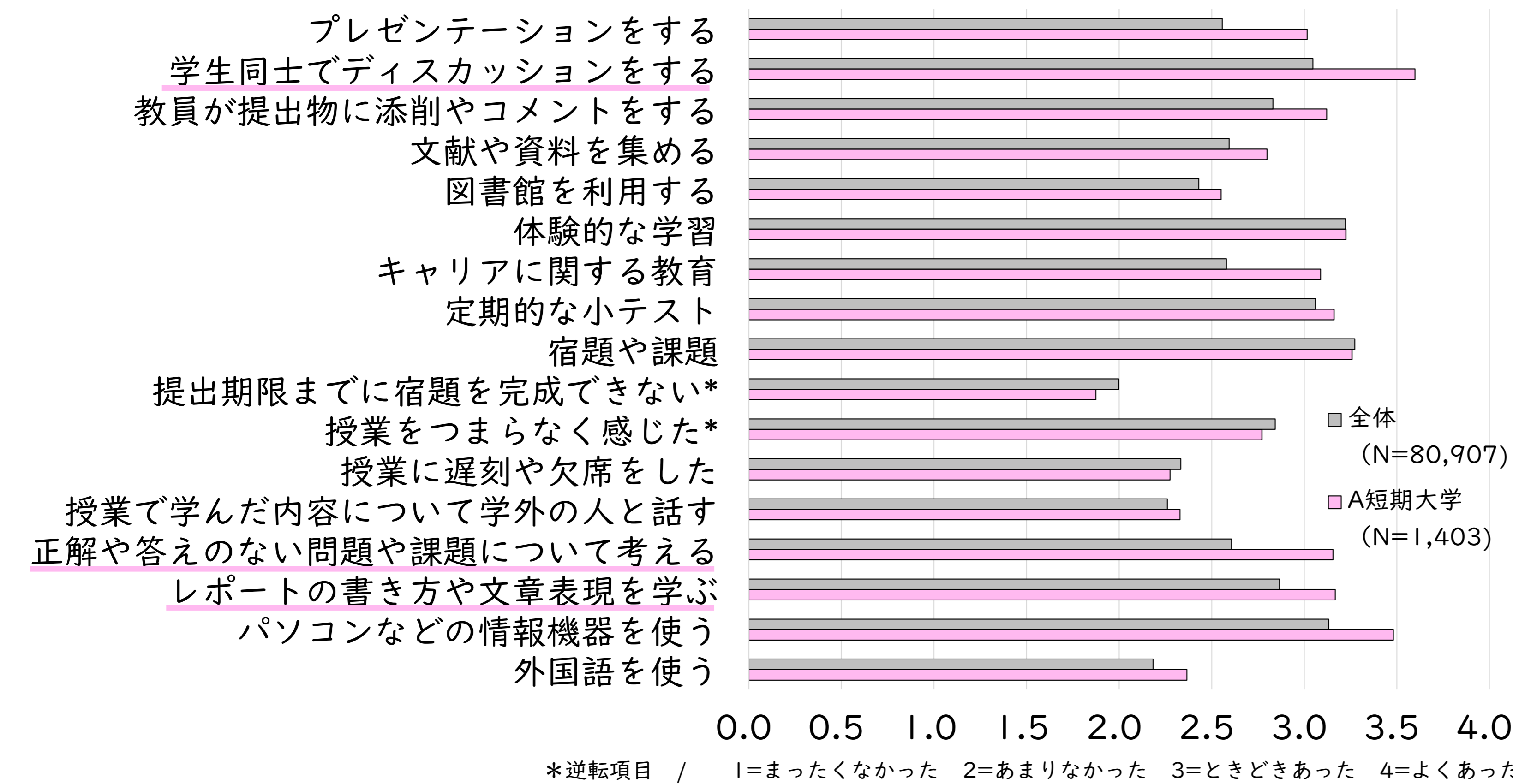


図1：授業における経験の全体とA短期大学の比較（2014～2018）

表1：授業における経験のA短期大学（2014・2018年度）の比較

	年度	数	平均 (標準偏差)	効果量	信頼区間(95%)	有意水準
	YEAR	N	mean (S.D.)	d	95% CI	p
プレゼンテーションをする	2014	286	3.10 (0.74)	0.31	[0.11, 0.39]	**
	2018	252	2.85 (0.87)			
学生同士でディスカッションをする	2014	286	3.54 (0.61)	0.13	[-0.18, 0.02]	
	2018	252	3.62 (0.61)			
教員が提出物に添削やコメントをする	2014	286	3.08 (0.78)	0.1	[-0.20, 0.05]	
	2018	251	3.16 (0.76)			
文献や資料を集める	2014	286	2.81 (0.79)	0.01	[-0.14, 0.12]	
	2018	252	2.81 (0.79)			
図書館を利用する	2014	286	2.66 (0.84)	0.12	[-0.04, 0.24]	
	2018	252	2.56 (0.84)			
体験的な学習 (実習、実験、フィールドワーク)	2014	286	3.25 (0.84)	0.05	[-0.18, 0.10]	
	2018	251	3.29 (0.82)			
キャリアに関する教育 (キャリア開発、キャリアデザイン、インターンシップなど)	2014	285	3.07 (0.93)	0.16	[-0.29, 0.00]	*
	2018	252	3.22 (0.81)			
定期的な小テスト	2014	286	3.06 (0.70)	0.37	[-0.38, -0.14]	**
	2018	252	3.33 (0.71)			
宿題や課題	2014	286	3.20 (0.68)	0.08	[-0.17, 0.06]	
	2018	252	3.26 (0.72)			
提出期限までに宿題を完成できない	2014	286	1.84 (0.84)	0.12	[-0.04, 0.23]	
	2018	251	1.74 (0.81)			
授業をつまらなく感じた	2014	286	2.74 (0.74)	0.04	[-0.15, 0.10]	
	2018	250	2.77 (0.77)			
授業に遅刻や欠席をした	2014	285	2.21 (0.90)	0.01	[-0.14, 0.16]	
	2018	252	2.20 (0.92)			
授業で学んだ内容について学外の人と話す	2014	286	2.34 (0.85)	0.08	[-0.22, 0.08]	
	2018	252	2.41 (0.97)			
正解や答えのない問題や課題について考える	2014	286	3.06 (0.86)	0.17	[-0.28, 0.00]	*
	2018	252	3.19 (0.80)			
レポートの書き方や文章表現を学ぶ	2014	286	2.99 (0.79)	0.43	[-0.44, -0.19]	**
	2018	252	3.31 (0.67)			
パソコンなどの情報機器を使う	2014	286	3.54 (0.56)	0.19	[0.01, 0.23]	*
	2018	252	3.42 (0.69)			
外国語を使う	2014	286	2.41 (0.93)	0.08	[-0.87, 0.24]	
	2018	251	2.33 (1.00)			

**p<0.01 *p<0.05

2014年度と2018年度の違い

- ①キャリアに関する教育
- ・2014年度「キャリアデザインA・B」のみの開講
 - ・2018年度から「キャリアデザインI～IV」を開講し、Iは日本語力、IIは社会人基礎力、IIIは各学生の進路に合わせた学び、IVは各学生の進捗に合わせた学びを提供
 - ・「インターンシップ（前期）」1年次 選択科目
- ▶キャリア教育の充実化
- ②レポートの書き方や文章表現を学ぶ
- ・初年次教育において「ベーシックスキルズ」を履修。日本語検定試験4級以上の合格も含まれる
 - ・「特別研究（卒業研究・論文作成）」2年 通年全学必修 4単位
 - ・「結果レポート制度」A短期大学では、欠席により学習が滞ることを補うために、半期で授業時間数の5分の1以上欠席した学生、レポートの提出が義務づけられている

▶卒論をはじめとする「書く」機会の多さ

- ③正解や答えのない問題や課題について考える
- ・共通教育「地元学（*仮称）（通年）1年・2年選択 2単位」
 - ・地元学（*仮称）では、災害地等の訪問を通じ、地域振興をはじめ、地元の産業や暮らしの現状と課題について学ぶ。学生自らが主体的にかかわりを創造していく科目であり、A短期大学における様々な、ALやPBL型授業のベースにもなっている
 - ・全ての学科において、通常の実習に加え、それぞれの専門分野に根差したPBL型授業を導入し、その多くが必修扱いとなっている

▶PBL型授業の機会の多さ

- ④パソコンなどの情報機器を使う
- 共通教育「情報演習IB」の必修科目から選択科目への変更により減少
2014年度「情報演習IA（前期）」「情報演習IB（後期）」1年次必修（計4単位）、2016年度「情報演習IB（後期）」を選択科目へと変更

2018年度「情報演習IA（前期）」履修者178名
2018年度「情報演習IB（後期）」履修者105名 △73名減

卒業生調査から得られた知見：
卒業生調査2015年度 5段階評価の4と5 = 37.7%（2科目必修）
卒業生調査2018年度 5段階評価の4と5 = 41.7%（1科目必修）

▶科目数の削減 = 質の低下 とは限らず、さらに経営面から見たメリットも生まれた

- ⑤プレゼンテーションをする
- 教育経験の実施頻度が落ちている要因の「見える化」は出来ていない
プレゼンテーションをする機会が多い教養・総合系の学生数の割合の増減は、2014年度44%、2018年度46%とほぼ変化はなかった

想定できることとしては、教員の人事異動に伴う科目担当者の交代や新任者の教授法の違いによることが考えられる
*ただし、それでも全国平均と比べると高い値になっている

Discussion

- ✓ 短期大学生調査を用いた全国及び自短大内での比較から、その特徴や変化を把握することができる
- ✓ 「④パソコンなどの情報機器を使う」から示唆されるように、数値が下がる = 悪い とは限らない
- ✓ 短期大学生調査の分析をしている研究者らでも、個別短大の考察においては表層的な部分しか示すことが出来ない

▶自己点検・自己評価の重要性

- ✓ 内部質保証の実質化においては、短期大学生調査のような量的データの利用に加え、短大内を理解している者の質的考察が必要

▶質保証の責任を担う学内者の考察+学外者による客観的な考察=内部質保証システムの構築